
偉大なる陰陽師の言霊術師

寒椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偉大なる陰陽師の言霊術師

【Zコード】

Z0821X

【作者名】

寒椿

【あらすじ】

ある何をしてもやる気のない少女が、トラックにひかれ、死んだ瞬間から運命が変わる！！言霊術師として“ある”陰陽少女に成り代わり、その世界で傍観を決め込みたまには原作に介入するやる気のない子の世界改革物語！？

プロローグ（前書き）

更新時期は不定期になり、寒椿の気分しだいといつとっても悲惨な結果になるとと思われます…

プロローグ

かつて人は 妖怪を 畏れた

その妖怪の先頭に立ち

百鬼を率いる男

人々はその者を妖怪の総大将

あるいはこう呼んだ

魑魅魍魎の主、

ぬらりひょんと

ル・シ・ラ・ル

気づいたら、目の前に大型トラックがあつた。止まる様には見えない。

『（ウチ、もう死ぬんだなあ……

それでも……

即死でよかつた（^ ^）b』

人生の最後にそう思つた彼女は、意識を落とし、この世を去つた。

『おしゃ——ツ、おしゃ——ツ』

誰、叫んでるの？

ああ、自分が。

「かわいい、かわいい私の子。やつと会えた。

あなたの名前は……そうね……」

ウチの目の前にいるきれいな女人は何かを考えるそぶりをした。

ウチの母はこの人か……結構な美人さんやなあ……

「そうね……やつぱり……

あなたの名前は、『ひる』、『花開院ひる』云々。」

拝啓、今までウチがいた世界の者たちよ

「ひるやひるは世に極の転生をしたらしく、ぬら孫の世界に。

しかも、よつこもつて、ウチが前世から嫌いだったキャラ、

『花開院ひる』云々。

プロローグ（後書き）

結構主人公はクールな性格で、あまり前世の世界に未練はなかつたりします…いきなりの転生という状況を冷静に丸呑みしたり、あれでも結構内心であせつていいはず…！！です

ウチと始まり（前書き）

やっと始まりました…転生物…
寒椿の最初の作品なので、ちょっと色々変な所もあるかもですが、
暖かく見守っていてください

ウチと始まり

『かあちゃん、まつてえー』

「ふふ、じつにじらっしゃい」

ウチが『花開院ゆり』になつて2年たつた。つまり、ウチも2歳。

あまり舌が回りず、赤ちゃん言葉をしゃべる二歳児だけど精神年齢
二歳だ。

つまり、

見た目は子供、頭脳は大人。名探偵コーン！

のリアル版だ。

……言つていて悲しい。

「ゆり」

「の姫は…

『あさふしや兄ーー』

そう、原作でキモくて怪しい三ツ目にとりつかれ、操られた妖刀職人？だ。

実際に見てみると分かると思うが、彼は結構な美形である。なので、よく癒しのためにほほんと見せてもらっている… イケメンは人類の宝…！

話を戻すと、ウチは今、母さんと兄様たちと一緒に遊んでいる。

……普通に、だ。決して式神など使っていない。

それと、一緒に遊んではいるのは秋房義兄だけではない。

そう、今ここに、未来の（今もだけ）『原作のゆら』の兄様がいると二人いる。

まず、兄の竜二だ。

原作では嫌いなキャラのトップランク入り！な人だった。実際に本物を前にしてみると、意外と優しい。本当にビックリした。たまにちょっとかいだしてくるけど、たまにいじられるけど、倍返し（ゲフンッ）えーと、スルーしてたら、優しくなりました。ちょつ

とだけね

次に、魔魅流君だ。

原作とは違つて明るい。というか、原作では『ゆら』のために力を手に入れ、あんな風に意識のない体になつたといつてはいるが、ウチのためにもあんなことをしてくれのだらうか…？

まあ色々疑問に思いながらも、ウチは育つてます。

「おこ、ゆらあ…今度はどんな遊びをするんだ？」

『えーと、うどんかうどんかうどんか…』

一応、眞の前では元気な女の子的な？（ウザッ

「じゃあ、オレが鬼だ！秋房と魔魅流とゆらが逃げるんだからなー。じゃあ、行くぞー！」

『「わああー逃げるー。』』

「ふふっ」

ウチのゆらさんはそれを暖かく、見守つていた。

ウチと始まり（後書き）

いよいよ始まつたといつても、全然原作には入っていません！…つていうか、次の話にはもう原作突入だと思います…相変わらず展開はやい…

ウチと原作突入（前書き）

いよいよ原作開始です！！

ウチと原作突入

ウチもとうとう十一歳、つまり中学生、つまり、原作突入！！

話を飛ばしそぎだといつ皆わん、これはただ単に作者がめんじくす（ゲフンッ　えー、あれからたいした事が無かつたからである。

ただ単に、花開院のクソジジイ共が『妖怪は黒、自分たちが白』とか『自分たちは絶対的な正義』と言つてきたり、おじいちゃん（2代目当主）とTKG仲間になつたり、式神 破軍が使えるようにたつたりと、色々と普通に過ごしてきた。

それはおひといで、やつと着いた『浮世絵町』の『浮世絵中学校』だ。

色々と迷つたが、やつと着いた中学校。でも、これからどう行けば…

おっと、前方に女の子発見！職員室までの道のりを聞いて…

『あの…「めんなさい」
職員室はどこですか？ 勝手が分からなくて』

「ああ…2階だよ」の棟の…』

『ねねねね』

ウチはそういうて、その子から離れた…

つて、あの子…完全に前世からウチが嫌いな自意識過剰少女『家長力ナ』…。どうしよう…まあ、ちがう風に感じぬかもしねないし、今は保留にしておこう…

しかし、あまり近づかないほうが良いのかな…？まあ、いいや…！

『京都から来ました 花開院といいます』

『フルネームは花開院ゆらです。 じつをよしなに…』

その後の休み時間、女子がにっぽこやつてきて、色々と質問をしてくる。正直言つて、う… 困る。

そのとき、後ろのほうでワカメ（酷い）が騒いでいるのに気がついた。旧校舎がどいいうとか、く呪いの人形と日記がどいいうとか…つて、

『その話…本当？それ…ウチも見たいんやけど』

完全にウチが原作で滅する人形やん！おっと、口調が京都風に…

ウチが思いふけつてこるついで、どいやら話が進んでいたようだ…

「清十字怪奇探偵団…今日はボクの家に集合だからなーーー！」

ウザッ…

ウチと原作突入（後書き）

色々と問題があるかもですが、これからもよろしくです。

ウチとワカメの家（前書き）

今回は清継の家に行きます！この話で主人公の能力が分かってきますよ！

ウチとワカメの家

「清継の家」

超成金、以上。

金田の物がいっぱいある。キラーン

そして、見つけた…あの入形を…

とてもすごい負のオーラを放っている。

悲しかったんだろうな…自分の大好きな主に捨てられて…

ウチがそう思つてゐる間に話が進んだようで、清継が日記を読み始めた。

【2月22日】

引越ししまあと7日

昨日 これを機に祖母からもらつた日本人形をしてることにした
といつても機会はつかがつてはいたが本当は怖くてなかなか捨てられなかつただけで 雨がふつていたが思いきつて捨てた

すると今日 なぜか捨てたはずの人形がげんかんにおいてあり 目
から血のような黒っぽい…】

ウチは人形をチラリと見た。
即行で人形から視線をずらした。

漫画で見ると普通だが、実際見るとホラーである。

リクオが人形にタックルをかまし、必死に黒い涙を拭いていた。（

(笑)

傍観するのはやる」とよつ全然樂しいと氣づいたこの口頭…

その後彼は清継の説教を受け、及川氷羅、もとい、雪女とこやこを話していた。

余談だが、氷羅、もとい雪女は可愛いと思つ…戦闘はちょっと残念だけど…

清継が日記を読み進める。

【2月24日

彼氏に言つて遠くの山に捨ててきてもらつた

その日の夜： 彼氏から電話

「助けてくれ… 気づいたらうしろの座席にこいつがのつてた…」

考えてみれば昔から変だつた…この人形…

気づけば髪がのびているようにも見えた…】

リクオと雪女が何かしゃべっている。おおよけは何かこれヤバくね、みたいな事だらう。

しかし、本当にかみが伸びている… といであげたらきれいなのに…

清継は聞こえてないのか、読み進める。

そもそもウチの出番か…

【2月28日】

引越し前日

おかしい…しまつておいた箱が開いている…【

「田記を…読むのをやめてええ
!!」

じまれ

「！？」

『 動きを止めなれ... 』

リクオを襲おうとした人形の動きを一時期的に止め、そしてそれに近づいた。

『 あなたはここにいってはいけません。分かってるよね? 』

あなたの望む人は光の向こうにあるから... 怖がらないで、安心して...
あなたをきっと抱いてくれるから... 』

【 ありがと... お姉ちゃん... 】

きれいな光が人形を包み込んだかと思うと、人形は花びらになつて
消えた。

「 ... お... 陰陽師... かい! ? 」

「 け... 花開院さん! ? 今... たしかに... あなた妖怪を... 被つたよね
! ? 」

ワカメが「るわこ」の領いとく…でも、

『確かに陰陽師やけび、言霊術師でもあるんやで』

「じゅあ…まわかわいのは…」

『ええ、本当にあぶないとしゃったわ（人形ちゃんが）』

「本当だつたんだ！…い…いたんだ…陰陽師…といひことは…妖怪も…！」

言霊術師でもあるとですけびーーのワカメ「わせえ…

彼の後ろでは雪女が震えていて、リクオがそれに感つている。

そういえば、雪女って何でこんなに陰陽師が嫌いなんだらう…他の妖怪でもこんな反応はあまり無いのに…

過去に何かあったのかな…原作ではあまり言つてなかつたからわかんないけど。それか、思い違い？

それはそつと、リクオが陰陽師が何か分かっていないみたいだから、

「このウチが説明してしんぜよ!」

『ウチは…京都で妖怪退治をなりわいとする陰陽師 花開院家の末
えい…

それであり、神の使ことされる言霊術師や』

「そういえば花開院で…トベできつたことあるよ!」

『それは…祖父の花開院秀元やな』

「そ、そんな有名人がなぜ…」

てかさつきからウチが話そうとしてるのに、何だこのワカメ…一話
の邪魔をしないで欲しい…!

『この町…浮世絵町はたびたび怪異におそれると有名な町

「そ、そーなの?」

『うわさでは妖怪の主が住む町とする言われてるよ!』

あからさまに雪女とリクオがビクツてなった…

ポーカーフェイスでないと、ばれてまつで…つて、また口調が京都風に…

『とは言うても、ウチはそいつらの陰陽師みたいにかんたんに妖怪は滅したりなんかせえへん…ビ�ちかつて言うと、妖怪のほうが好きなのかもしけへんなあ…』

「え…それってどうゆう…」

ウチが最後に言つた言葉はどうやら齒に聞こえてたようだ、分からぬといつた顔をしていた。

ワカメはワカメで、自分の部活?にプロが来たと騒いで、ウチに延々と『憧れの人』のことを話すし…

ていうか、あんたが探してゐる人物、あんたのすぐ隣にいるじやねえか…

『氣づけよ…（呆）

気づいたら、どんどん話が進んでたようで、次に行くのはリクオの
家らしい…

あそこには妖怪の宝庫だからなあ…早く行きたいなあ…キラキラ

今日のまとめ：結果的に、ワカメはウザイ。

ウチとワカメの家（後書き）

やつと主人公の能力が分かつてきましたね…これからも頑張ります
!!

ウチと素敵な日本家屋

『じゃあ、いつてくるわ…』

『はい、こいつらしさに』 二ノッ

今の誰！？と思つた人、ウチのオトモダチのせいりゅう（「ホッ…ちよつと偉い神様や。

細かい」とは気にしたらアカン！

と、まあ、オトモダチに見送られて、ウチはリクオの家に向かいました。

相変わらず、ワカメはつぞい。何か話しかけられてるけど、全部スルー

「それにしても、うわさにたがわぬボロ屋敷」

そつワカメがぬかすけど、ウチはテメエの成金屋敷より、この純和風屋敷のほうがいいんじゃボケエ……！

「「めぐ」めん遅れかやつて……」

「本当に遅いぞ奴良君！――むかせと案内したまえ」

本当に失礼な奴やなあ……ワカメ

「妖怪屋敷で妖怪会議だ……！」

「ちょっと清継くん 奴良くんに失礼だよ

「かまわんよ」

本当に「うぜえ」ワカメ……それにしても、この屋敷ホンマに妖氣むんむんやなあ……

ちゃんと隠さないと、竜一兄が来たときに皆全滅しちやうかもよ……？

（客間）

ビュウウウウ

ガタ ガタ ガタ

「・・なんか、本当に出来ない」

「奴良くんこんな家に住んでたんだね」

「いい雰囲気 それじゃ始めよう」

「今日は花開院さんに…プロの陰陽師の妖怪レクチャーを受けたい
と思います」

めごとくへこみさだ、畠の安全のためやし…

『そう やね…』

『最初にこの前の人形 あれは典型的な ？付喪神？の例や』

「つくも神？」

「島くん！！君は何も知らないねえ！！」

『 器物百年を 経て化して 精靈を得て より 人の心を誑
かす 』

『付喪神は打ち捨てられた器物が変化した妖怪や』

『 妖怪は色々な種にわけることが出来る。』

人の姿をしたもの 鬼や天狗 河童など超人的な存在

超常現象が具現化したもの…さつき言つてた ふらり火など
妖怪の1／3は火の妖怪といわれてるんや

やつらの目的は…みな人々をおそれさせるとこや

なかでも一番危ないんは獸の妖怪化した存在！
やつらの多くは知性があつても理性がない

非常に危険や！

欲望のままに 化かし 崇り 切り裂き……食べりつ……
けつし……わわらぬよつ氣をつけてほし……』

「……まだ、圧倒されたのか、緊張しながらウチを見ていた。

『 そして それら百鬼をたばねるのが
妖怪の総大将 「ぬらりひょん」といわれています 』

リクオがギクッとした。何かいじりがいがありそう…

『「われでは……この町にいつこしてこるとこつ

「？ぬらりひょん？か…」

「妖怪の主とは言え…小悪党な妖怪だと思つていたよ…」

『 もんなことありくん。』

日本には古来からやせやせめな妖怪がいたとかんがえられてる…

ややかさうちは、そんな妖怪たちみんなが恐ろしい存在ではないと思つたや…弱い、力のない妖怪もいたかも知れない…

ぬらりひょんはな、そんな、よわい、妖怪たちをかいついたりはしないかと…ウチは思つ

かいつて、悪せがりをすねやつではなこんよ…』

「え…？」

『 なんもあらへんよ…つよ…奴良くん』

やべえ…今リクオつてよびそつだつた…

「あ、ああ…うん（カラス天狗と似たことつてゐ…~。）」

『 だから…ウチも、ぬらりひょんみたいに「弱い」妖や神様たちをまもつてこきたい…できれば、ぬらりひょんにあつて世の「ひとも」をきたいし…』

セフ…ウチは原作の『むら』のよつこ、妖怪封じて認められたいなんていれっぽつちも思つてない！

むしむ、妖怪さんたちとはオトモダチになりたいし…

皆ひとつこの話は壮絶すぎたのか、誰も数分聞いてかなかつた。

そんな中…

「お茶入りました～～～

ナイスボディーな雰囲気コルコルしたお姉さんが入つてきました
て、おもいつきし妖怪じやん！

リクオの顔がブラックホールになつてる（笑）

「じゅつくつ」

パタン

「何…？誰？」

「おねーちゃん…？」

「奴良あんなす！」このお姉さんがいるのか！？』

リクオ監の「」と置いていったけど、そんなことしたらみんな、探検に行っちゃうよ？まあ、ウチもその一人だけね…

「あ…セーいえばお手伝いさんがいるって言つてたっけ」

『お手伝いさん…？（世話係兼側近兼下僕だろう）』

『（ちよつといジワルしようかな？）そつ…今のが…』

「の家は……どうも…変やな』

にしても、この家…妖気メツチャ充满してるやん…本当に妖怪さんたちは隠れる気があるのかいな…

一番感じないのは…さつすがあ 蟻魅魍魎の主、ぬううひょん

リクオには悪いけど…ちょっと「」探検してみたいし、じゃあ行きますか…！

「その頃、リクオは……」

「やあみんな おまたせ」

ガラーネン

「アレ?」

「『』に行くんだい花開院くん……」

おーおー、す『』い勢いで妖氣が逃げてる…

あつ…リクオが追いついてきた…

『奴良くん、ええなあ…』んな家にすめて…』

「なにこいついるんだい花開院くん……」と、なボロ屋敷のどいが良いんだい！？」

『最高やないか…にぎやかだし、なあ…奴良くん？』二口少

「（すでにほととじバレてる……）」「

「みんな～～もどつて妖怪の話しそ～～～～～～

あ！～それよりゲームしようよ～～古今東西妖怪でやね～～なんて

』

「だめだ』やつやな。せこなるといふやがた…勝手はわざわざわたりへんしな

ウチの勘違いや。』あんなあ…奴良くん…』

楽しかったけど、やつやなやつらな、リクオがかわいそつやしな…

「あ、ひひそ…」

「うう」

ワカメ、わわわ

そのあと無事に畠、元の客間に戻った…

「…………」

「特に…何もなかつたね…」

リクオがホツとしたのもつかの間、

ガラ ガラ ガラ

「おうリクオ 友達かい」

キタ

！－（ ）／＼ 魑魅魍魎の主、ぬらりひょん－！

「…………ツ－！」

リクオ「」ける？（笑）

「あつ」

力ナおじぎ

「エハモホジヤ まつてます」

ワカメもおじぎ

リクオのお皿がブラックホール（笑）
てか、マジでかわいそつ…

「おーおー めずらしいのうお前が友達をつれてくるなんてな
アメいるかい？」

あれは…有名な宇佐美ばあさんのアメ…「記念にもう一つ…」

「どうぞみなわん これがひも孫のこと よりしあつたのんまか」
ペカー

『あ…ハイ…（やうだ…）』 ペローン

「こ」と呟えた…！

『おじこちやん…何か？ ぬりひょん？ みたいやなあ』

「なつなつー！け、花開院わんーそ、そんなことあ、あるわけ、な、
ないじやんーーあ、あせは…」

リクオよ…ポーカーフェイスを保つていなければ、本当にバレてし
まうぞ…

『ぬひつ…へひつ…ヒツヒツぬヒツヒツが、なあ…つ。』

「ねもんかこ」とこひさじやの「へー…じみがちがひ、ぬせへ。」

『“花開院”ぬひだわ』

ちゅうと“花開院”を強調して言つてみた…

「やうか、そつか…」

『花開院“秀元”とは知り合ひだと、そこへおつます。』

「最悪の悪友じや… さつせつせつ」

『しつかし、ホンマ、ねうじひょんみたいやなあ… “ねうげせん” つてよんでもええ?』

「… そんな風によばれたのは“秀元”以来じや はつはつは

『ナリなん? ふふふふ』

チラリとつクリを見ると、灰になる寸前だった。それからやめると可哀そうだしなあ…

でも、楽しかったわあ…

そんなことがありながらも、奴良家探索は終わったのだった。（アレ口説く…）

ウチと素敵な日本家屋（後書き）

カラス天狗のセリフに何かかぶつてますね…まあ、結果的に言うと、主人公は純和風と妖怪をこよなく愛する変人少女なのです…！…これからも、主人公ともどもよろしくお願ひします！！

ウチと田嶋のネズ公（前書き）

ちょっと、少しだけど残酷なパートがあるかもです…捉え方は人それぞれなので

～その日の夜～

今ウチは、田鼠がいる一番街にいる。

原作で、『ゆう』とカナが田鼠につかまるときについた場所だ。

ちなみにウチの今の格好は、制服ではなく、夜のリクオが着ている
着流しみたいなものだ。

そのまま制服なんか着て、原作みたいに破られたりでもしたらヤバ
イからな。

てか、せっせかから周りにいるチャラ男どもがつるや。

いちいちこんな中坊に声かける暇があつたら、もつとそりそり辺に

いるケバイレーティーたちを相手にしりつての。

そんなウチの心の内を知らないキャラ男どもは全然声を掛けてくるのをとめない。

そのとた...

「ゆりちゃんー。」

『あ...えと...家長さん...?』

「この時間は危ないよ　この辺」

『え?』

「いじつ　何処住んでんの?あ、一人ぐらしなんだよねー」

『えーっと...やつ、やけど...』

カナが来た。ウチの嫌いなキャラトップ（以下略）

助けてくれたのはいいんやけど、これからひとつと邪魔になつやつ
やなあ…とか思しながら、彼女と一緒に一番街を歩く…

後ろに妖氣を感じふりむく…

「ねつ、女の子が落すことであるよ～～～
ひーひつたー俺の店まで持つて帰つちやおーつと」

しゃべつ方まで「やつて田鼠がいました ワオ

ビハコハコハコ…

「こいこい…やひひひん」

『下がつて…家長さん』

「やひ…やあん…?」

「つれなくすんなよ仔猫ちゃん▽▽

アンタ、…三代目の知り合いだろ

夜は長いぜ 骨になるまで…しゃぶらせてくれよオオ▽▽

やつぱり、田鼠は自分の顔をネズミのソレに変えた。

リアルで見るとマジキモツ…

「か…顔が…化物ツ…」

「長い夜の始まりだ」

田鼠がそつこつた瞬間、物陰からほかの奴らもでてきた…

一人でなら、オーケーなんやけど、今力ナガあるからなあ…

ひよひよせりありこかも…

「なに…へしれ…？ むりやん…」

『廻聞… 説明したとおりや 獣の妖怪化』

「え…？」

「ねとなしへじてつやあ…・・・痛い田尻なくてすむゼルー」

『・・・クスッ、ねずみふせいが・・・糀がるんぢやうわ

ウチから離れんどいてね家長さん…』

「へ、うん」

カナの「」とをせばに引き寄せ、そして 式神・貪狼 を呼ぶ

『（嫌いだけど、助けないと）貪狼… 家長さんをねりやんといこ

つれてつて

貪狼が力ナをのせて去つていくのは見送ると、構え、そして呴いた。

『 青龍、朱雀よ… 我が名の下に召喚されよ』

すると、ウチを中心に五^{ウチ}星が地面に浮き上がり、中から真っ赤と金の羽を持つ朱雀と、青くキラキラと銀に輝くウロコを持った青龍がでてきた。

二人は瞬時に人型になり、ウチの隣にたつた。

「呼んだか、呼びましたでしょうか？」主婦

『貪狼だけじゃ不安やから、朱雀、ついていつてくれへん?』

朱雀がいなくなつたのを確認すると、青龍に言つた。

『ただのネズミや… 青龍 殺してしまへ』

『我が主の頼みならば』

青龍は「うう」と、ビビからうともなく水を出現させ、それを尖らせ
ネズミをどんどん突き刺し、殺していく。

「なんだ」いつあーー?」

「ううう… ううう… 式神をつかつてやがる… 術者だ!
陰陽師だ!… それも… 生半可ねえぞお…」

「ううう… ううう… 二代田はうううな好き者だな…
そんなふうううなモノはしまーなよ」

田嶋はうううと、ウチのうううをねねねとついた。

『さわんじやねえ……ネズ公やあ……』

「……あ？」

原作でもキレてたし、どうせキレやむなら、もつと面白いやつがいいだろう……？

と、まあ、あの後ネズ公がキレて、ウチはつかまつた。

なぜ省略するかといつと、普通に考えて、神様いながら負けるとかありえないよ？だから、一応ストーリーを進めるためにウチはつかまつた。

勘違いしないでね……ウチや青龍はそんなに弱くない。

ただちよつと、おなすいたなあ～みたいで油断して、その時殴られてつかまつたわけじゃない。

その時、青龍のほうの召喚を間違えてといたなんて、そんなこと断じて起つてない！！

全てをまとめると、ウチは一人、つかまつた。

「その頃、奴良家へ

ボクが縁側のほうで立つてると、誰かが庭のほうに空から降りてきた。

「総大将はいるかー？」

「え？ と、奥にいるとおもうナビ… って、カナちゃんー？」

髪が短く、赤い男はそれを聞くと奥のほうへ行った。

「コクホクと、じつじょい、おひがやんが私をかばつて……
まだ、あの化物たちのところに……」

彼女は全てを語つ前に、戻つてきた赤髪の男に氣絶せられた。

「カナちゃん……」

「……」

「え、あ……うん」

男はそのまま、カナちゃんを連れて、奥のほうに行つた。

すると何処からか声が聞こえた

「若……リクオ様」

「え…？」

そこには面たのせ體。

たぶん、妖怪の一種なのだな、と悟った。

「お初お田にかかります
私 田嶋組の下っ端の使ひでござります」

「田嶋組……？」

ウチと田嶋のネズ公（後書き）

主人公、うつかりミスで捕まってしまいました…危険な所でドジッ
口なのはこれからも続くのでしょうか??

ウチと若の初対面（前書き）

ようやつと、主人公がリクオさんと夜の対面を果たしますーー！

ウチと若の初対面

『…………』

『…………』

「よつ陰陽少女 どつだ…? ネオンの光の中 処刑される仮分は…?」

『…………』

てか、ウチ、言霊術師でもあるんやけど…

「やつだ…あの…三代田のガキが…約束を破つたからな…」

「こつひれつきから…ヤ…ヤしてキモ…なあ…

『三代田...? (リクオの「とか) ネズ公... それがどうした?』

「おー女... その名で呼ぶなや 」この町ではな... 星矢さんって呼べや
「...」

ネズ公の周りにいたモブ一号をウチの着流しをつかみ...

ビコイツ...!

と、行く前にウチはそいつの腕をわじづかみにし、柔道の一本背負
いよろしく放り投げた

檻の中からびりびりやつて? とこつ質問は「の際なし」...

「つーー! 獲物風情がーー!」

『ネズ公風情がウチにそんな口にさきかたとはなあ...』

闇よ... 」の者どもを沈めよ... ーー』

青筋を立てながら、床に手を置いて静かにしゃべる

すると…ウチを中心に黒いもやが広がった。

そのもやから離れようとするとネズ公の部下どもの足をもやの中からあらわれた漆黒の骨ばんだ手がつかむ。

それでもやがウチに戻ってくる頃には、少し離れた所にいたネズ公とそいつの部下以外、誰も残ってはいなかつた

それでも、ネズ公の部下は増えるばかり…

さすがのウチも、こんな大技を何十分も使ってたら、つかれるぞ…

やつぱり、ウチは陰陽師やから、リクオは助けに来ててくれへんかもなあ…。

『おいネズ公…ウチはまだ力の1／10も使ってないぜえ？

それに…むかつくけどもう一人の、あの女やないと三代目はこない。こんな絶対的な力をまえにしても、てめえはウチを殺すか？ あ、あ、あ？』

ドスの効いた声でネズ公たちに言ひ。

「フンッ いくらでもネズミを増やしてじわじわと食い殺してやる

知つてるか…？人間の血はなあ…夜明け前の血が一番ドロッとしてうめえのよ

ちょうど…今くらいのなあ…？」

ウチの言つたことに対するスルーかこのやうひ…。

『 チツ 閻の力よ！ 我を守れ、敵を討ち滅ぼせ…！

』

ウチがそう呟くと、ウチの周りからは闇の陰が現れて鋭い槍のようなるものになるとネズ公たちに向かつて飛ぶ。

多くのネズ公の部下は消えた。

しかし、肝心のネズ公だけは見方を盾にしていたため無傷だつた

てか、最悪の大将だな。見方を盾にとか…

これってまさかの？玉章？のパクリかッ…！…そうなのか…！

おなかすいてるし、眠いし、色々バッドコンティショングが重なつて
いるためか、ちょっとヤバくなつてきた…
てか、ちょっと違う方向にハイテンションになつてるんですけどー…？

どうしよう…四神の誰か呼ぶかなあ…

ウチがそう思いはじめたとき、どこからか、靄が出てきた…

発信源をみると……奴良組の百鬼夜行がいた……

ウチはそれに驚き目を見開く。

「な……」「……」

『……（キタ）（ ）（ ）（ ）……なんで？』

「星矢さん……」「これは……？」

「星矢様……！」

「化猫組の奴らがいますぜ……」

『（化猫組……？）とは、良太猫がいるのか！？』

急いでキョロキョロとあたりを見回す……

「化猫組よ……あいつらか？」

「ああ……憎い……ねずみだもだ」

『うそ……（イタ）　　VV良太猫発見！！VVかわええなあ：（うつ
とり……）……それと、あががリクオカ……やつぱ……かつこいいなあ）』

ちなみに、ウチがこんな風に思つてゐるその間、ウチはポーカーフエイス（無表情）である。将来、アカデミー主演女優賞もそうなめ！？

「何者だあ！？テメー！」

「本家の奴らだな……」

「二代目はどうした!?

卷之三

一回状は!?回状を見せる!! ちゃんと廻したんだろーなあ!!!」

ネズ公たちは騒ぐ……マジうぜえ

「……ヤツが書いたのなら破いちまつたよ」

「んだと！」

ネズ公どもがそりて騒ぐ。そういえば、わたくしの借りを返さなければ
なあ……？

「ならば約束通り 殺すまでよ」

『それは……だれのこともネズ公……？』

「もううた、テメヒのひと（バキイイツ ゲボアツ）

ネズ公が言い終わる前に、そいつの顔面を殴り飛ばした。

（うふ……いい具合にぶつ飛んだな……いい汗かいたわあ……（キラキラ

でも）の後のためには、ちよつと飛ばし過ぎたかなあ……？

『おこ、ネズ公……真土の土産にもってけや
ウチらの家はなあ……やられたら、倍返しが基本、さつやといつち
いや……まだ、倍返しの？ ば？ ともなつてへんわ……』

今、その場にいる妖怪さんの顔が引きつったのが分かった。
せやけど、今のウチにそんなことを知ったこつちやない。

する

まあ……それはやつやなあ……ええ、こじはづなあ……リクオくん……

夜の君とは馬が合へそうやなあ

『 プ プ ッ
だ つ て あ 』 一 ヤ ッ

ホンマにださいわあ……てか夜の帝王って、ゼリの中一病患者……？

「なつ！ なめやがつて… てめえら みな殺しだあ
「…」

ソレを合図に妖怪同士の戦いが始まつた：

ウチは死んでるかって…？

くくく……そ、ウチは逃げるだけや……！

抗争が始まり、どう、安全に逃げ出すか考えてたとき…

「つかまって」

『へ？』

ガコオオオン

原作よりはちょっと遅いけど、ウチが入っていたケージを青田坊が壊し、

そして首無がウチのことを助けてくれた。（羽織りもくれたわあ）

やつぱし、生の首無はイケメンやなあ…

浮いてるナビ、首。

ウチが首無のイケメンぶりに感動？している間に、

ネズ公の下僕どもはだいぶリクオの百鬼夜行にやられてたみたいで…

「なんだ… てめーら… 誰の命令で動いてる…
百鬼夜行は主しか動かせねーんじや…」

「何言つてんだ 田の前にこるじやねーか

「何… も… まさか」

「「」の人が… ねうつひょんの孫…」

「妖怪の総大将になるお方だ…」

もひ、リクオの血口紹介？をしていた。
にしても、リクオくん、モテモテやなあ…

「そ そいつが… あのガキの… 覚醒… 姿…？」

「やつぱつ… あんとも殺しことせやあよかつたじやねーかあ！」

ネズ公（小）がネズ公（特大大盛大サービス）になりましたーVV
ワオ

今のウチの感情を素直に言つと… ここつマジでキモい
終了。

「おいつめりれて牙を出したか

だがたいした牙じゃあないようだ」

リクオがそう言つた瞬間、ネズ公の周りを蒼い炎が包む…

いやあ…綺麗だなあ…

「てめえらが向けた牙の先

本当に…闇の王んなりてえなら歯牙にかけちやならねえ奴らだよ

おめえらは…オレの…下?にいる資格もねえ」

「奥義明鏡止水　? 桜?」

「な…なんじやこりや…」

ネズ公が叫ぶ。

そのまま轟く流れながら、死んでいけ……

「その波紋鳴りやむまで 全てを・・・燃やし続けるが」

「夜明けと共に 塵となれ」

やつぱし、かつこええなあ夜のリクオくん…

（原作での橋の所）

『ちよつとまつて…あんた…奴良組三代目やん…？』
あえて、ソクホくんとは言わない…

「　　「　　「　　「　　「　　「

皆の驚く顔は面白くなあ……

『これからは陰陽師兼言霊術師と妖怪さん、仲良くなしてかない？』

あ、それから、ぬいぐるみによじついていた『

「せこせこ氣をつけて帰れ」 フツ

リクオはニヒルな笑みを浮かべながらソラツツヒト、ウチに背を向けた

『やつこえば羽織り、ねねわい』

「首無…お前 女に甘いな

そつまつているリクオの声を聞きながら、

『やつこえば羽織り、十分甘いと呟つた

やつまつているウチであった

ウチと若の初対面（後書き）

その際、主人公のしゃべりかたが変だとか、統一されてないとか、無視でお願いします！！それも彼女の個性なんです！！

ウチとツクマヤとお前呼び

「うりやまし~~~~~」

ワカメが「うざい…

「うりやましくないよ…………すうじく怖かつたんだから…!
ゆうひやん…あのあと大丈夫だった…?」

「だけど…………だけど…………

ちきしう なんで君らだけ!! ボクも一番街に行けばよかつた!

!」

だったら、一人で一番街に行つてネズ公どもに食われてりやよかつたのに…

このワカメは絶対に一回は痛い目あわないと、ウチの氣がすまん…!

『家長さん……怖い思いをさせてごめんなあ……
ウチがもつと早めに気づいていれば……』

口ではそうこいつてるけど、ウチが実際にそう思つてゐるわけないやん
……

なぜなら……『家長カナ』はウチの嫌いな（以下省略）

でも、カナはリクオと『フラグ』がたつてもつてゐし、この先のス
トーリーにも大切なんだよね……

「しかし君がピンチだからこそ彼は現れた！！

それでこそボクのあこがれる夜の帝王……妖怪の主なんだ……

……

ワカメはウチにかづつてきた……てか、ウチがいつピンチになつた
と言つた……？

夜のリクオくんが来てなかつたとしても、ウチは多分どうにかでき
た……

そりゃ……昨日が田鼠編なら、今日リクオ風邪で休むんじゃなか
つた？

皆が行く前に先にいつとし...一緒にいくと、ワカメがうぜえしな...

『あの... 今日ウチにこれから用事があんねん... 先に帰つてもええ...?』

「ああ いいとも花開院くん... ではまた明日... つてやつぱりまつてくれ! まだ『ゴールデンウイークの発表をしていない! 』待つてくれ 花開院くん...」

後ろでワカメが何か叫んでるけど、ウチには関係ない。

誰にも風邪で欠席つていつのこ~~うづ~~いともうれしないなんて...

リクオくん、同情するわあ...

♪奴良家の門の前♪

『すいませーん... 奴良くんの友達の花開院といつものなんですが... だれかいませんか...?』

「はーい…まあ、リクオのお友達?…どうぞ、あがつていいで」二口少

ウチが声を掛けると、中から若い女の人がでてきた…

まさか…この人は…若菜さん!…?

『あつ…どうも…』

本当にほほんとした雰囲気の持ち主やな…

若菜さんとの出会いに感動しながらも、リクオの部屋まで案内してもらつた…

その間に『若菜さん』、『ゆうらちやん』と呼ばれ、呼ぶような関係になつた。

（つまり、世に吉田オトモダチゲットだ！）

「うわよゆうらちやん リクオちょっと寝てるかもしれないから、」

『あ…大丈夫です 寝てたら帰りますんで…』

「 もう… へじゅ ありクオをよろしくね」

若菜さんはそうこうと、ウチをリクオの部屋の前に残して去つた行つた…

「 これ 」 一人で立つてみると、何か緊張するなあ…

ウチは気合を込めると障子にてをかけ、それを少しあけた。

『 奴良くん… 寝てるんか… ?』

『 けつ 花開院さん… なんで 』 『 いるの… 』

リクオは布団の上にいた。

頭の氷がまだ小さつちゅうとは、まだ雪女は来てへんのかなあ…

『 奴良くん 今日 風邪 でき へんかつたやん… ?』

『 お見舞いにきたんやけど… 邪魔やつた? それならすぐ帰るけど… 』

確かに 『 』 は妖怪一家、奴良組、の本拠地、陰陽師のウチは厄介ごとしか持つてこないみたいだけど

それでも邪魔とか言わされたら、ウチ、ショックひたるわあ…

今のウチのホーリは真っ黒いと思つ。

怒つてゐる黒じやない、悲しくてショックを受けている黒だ…

実際にちゅうと沈んでこます…

「えつ… セツシツの意味じやなくて… あ、ありがと… お見舞にきて
くれて…」

それに気づいたリクオくんが焦つてゐる…のか?

『ええよ それに… 今からほかの人たちも来るとおもつよ…?』

「ええー…うそ…」

『何かダメだつたん…?』

「そ そういうわけじやなくて…

そつこえは花開院さん… あのあと無事帰れたんだね よかつた…』

『ああ……うん……ありがと』

ほのぼした空気が流れる……

しかし、その間にウチの中では一つの疑問がわきあがっていた
‘あのあと、を聞いてくるヒトヒトは、夜のこと覚えてるんじゃないの……？」

原作では牛鬼編までそうじやなかつた見たいけど……

ウチが真剣に考えていると、ウチの周りからまた黒いオーラが出て
きていたらしく、リクオはなんだか心配しているようだつた……

「けつ 花開院さん！ 大丈夫？」

『あ……ああ 大丈夫……それと花開院は長いから“ ゆう ” でええよ』

「うん……じゃあゆうちゃんも名前で呼んでよ」 一一口ッ

『わかったわ……リクオくん』 一一口ッ

一応、リクオから名前呼びの許可をもらつた！

この調子で全キャラ制覇するぞ……オオオオオ

そのまま、ほのぼのとリクオと喋つているが、廊下のほうから誰かの足音が聞こえてきた

ちょっと遠いけど、多分ここに向かっているとおもつ……

もしかしたらリクオの側近の妖怪一人かもしれないが、ウチは押入れに隠れることにした……

『リクオくん……ウチちょっと眠いからここで休んでもええ……?』

失礼を承知で聞く

「あ……ああ いいよ； 布団敷く？」

以外に普通の反応やなリクオくん……あんま面白くないわあ……

『大丈夫 ここで寝るし』

そういうてウチが指差したのは押入れ。リクオくんもウチがここに入るとは思つてなかつたらしく、とても驚いていた。

「えええええー！？そこー！？ダメだよーーほこりとかいつぱいあるよー！？」

『大丈夫 大丈夫 ウチはそんなやわやないし ほこりとかも平氣！』

『そういう問題じゃ…』

『大丈夫ー！それと誰かきてるみたい…？ じゃおやすみなリクオくん』ニコニ

ウチはそういうと、押入れの中に入つていった。

「ええええええー！？本当に入つちゃたー！」

リクオくんが騒いでるけどこの際無視。眠いし。

ウチが押入れに入つて数分、誰か部屋にきた。

やつぱし毛倡妓とかの側近の妖怪をひたひたやつた。

リクオくん多分ホツとしてるんかなあ…ウチがいないから

よし、じゅあ…ウチも寝るか

そうウチは思いながら、夢の世界へと旅立つて行った…

（ウチが寝始めて數十分後…）

『（何か外がひつむわいなあ…）』

眠っていたのに起されたウチの機嫌は最悪

人の部屋で何騒いでるんか…

ウチが外のつるわれにイラつき始めたと... ウチの斜め上を何かが通りすぎた...

カサカサツ

『へつ?』

ウチがそこをみると、そこにいたのは黒光りする“あいつ”で...
どさんウチに近寄つてくる...

『ひつ...』

ここは狭い押入れなので、どんなに後ろによつても“あいつ”との距離は遠くならず、縮まる一方で...

どんどん近づいてくる…ウチは今、こいつを呑める物がない…

あと、接触まで数センチとなつたときに、ウチの中で何かが爆発した。

（その頃リクオたちは）

ゆらちゃんが押入れに入つてから色々な人たちがこの部屋をしきをしていたけど、ゆらちゃんは押入れから出てくる気配はない…

本当に寝ちゃつたのかなあ……？

今ボクの周りにはさつきお見舞いに、と来た清継くんたちとお茶を

持ってきたはずだった雪女、もとい氷羅だ。

清継くんは今度の「ゴールデンウィークの予定を発表しこそたよつで…

しかしそれはボクに嫌な予感しか起じれない…

（リクオ side end）

「ボクが以前からコンタクトを取つていた妖怪博士に会いに行く！」

皆から大ブーイングを受けるが、清継はそんなの関係ないようだ…
てか、嫌な予感的中…

「場所はボクの別荘がある捩目山…！」

今も妖怪伝説が数多く残る彼の地で…妖怪修ぎよ『ややああああああああ…』

『…』

ウチは押入れの襖は蹴破りでてきた。

最後にワカメが言つたセリフとウチがあげた雄叫び?が重なつた…

『いやああああ…リクオくん…助け…お 押入れに…あ…
“あいつ”が…』

ウチはそう言いリクオくんに飛びついた。抱きついたではなく、飛びついた（ ）に重要

ちなみに周りの皆は驚いていた。

「えええええ！？ゆらちゃん大丈夫！？てか “あいつ”つて！？
(もしかて妖怪！？)」

『あ…あの…く…黒光りするGが……』

「Gつて もしかしてコキブー』言つなあああ…』

キャラが崩壊する寸前だが、皆さんもアレに接触されたらしくなる
と思いますよ

「だ 大丈夫だよ… もついないよ…」

リクオくんはわざわざ押入れを見に行つてくれた。

風邪で動けないのに…ごめんね（涙）

『そ そうか…いやあ～すまんねリクオくん…』

ウチが取り乱してしまつて…

「（変わるの早…か妖怪じゃなくてよかつた…）」

皆はこれが起つてゐる間、びっくりしそぎて動けなかつたよう…
見ていて面白い感じになつた。皆、顔がポカーンとしている。

リクオはちゅうと安心して。

おおよそ妖怪じゃなくてよかつたとそんなのだらつ…

『で 何話してたん?』

「ああ ポールテンウェイークの予定の」と…とか もしかして本当

に寝てたのー?・

『こやあーホンマに眠たくてな……』

ウチも本当に寝るとは思わんかったよ……

「そりなんだ……・

ウチとリクオくんは周りを気にせずそのまま話す。

てか、今ちょいびっこメが発表してた所、ウチの呟び声がダブって
なかつた?

ハツ、ざまあ……（一ヤニ）

その後、皆無事に放心状態から抜け出せたようやナビ、ウチは質問
攻めにあつた。

先に帰つたんじゃないの?とか、何で押入れというか奴良ん家にー?
?とか…

まあ、全部苦笑いでかわしたけどな！！ ハツハツハツ！！

家長力ナからは何か疑う？不思議に思う？よつた視線をもらつた。
別に欲しくないけどな！！

リクオくんから「ゴールデンウイークの予定の大体のことは聞いたから、ウチはあのあとそのまま帰つた。

やつと牛鬼編かあ

ウチはあそこに着いたらどう行動したらいいんだろ…

リクオくんの後ついていつてもいいけど、そしたらあの子たちが危ないよなあ…

ウチはあまり面倒「」とは嫌いやしなあ…でも夜のリクオくん見たい
し…

てか、原作では今回の話で夜のリクオと昼のロクオくんが混ざる?
合体? するんじゃなかつた……?

ウチが何か知つてることもバレる……?

今回、色々と面倒……ことが多いなあ……ハア……

ウチはやつ思いながらも次の日のためにもいつもより早く寝床についた……

ウチヒツクマヤヒヒ前呼び（後書き）

主人公はどこまでもマイペースに、天上天下唯我独尊！…がモットーです！…多分

ウチと牛鬼編突入（前書き）

更新遅れてすみません… 楽しんでください…！

ウチと牛鬼編突入

「さあ……みんな　いいかな……？それで……」

全員が静かに頷いたのをみ、清継の合図と共にカードをテーブルに出した。

「ぐああああ　また負けたああ」

「くそ　またリクオと花開院さんの勝ちかよ」

「ちくしょー　持つてけよ…賭けたお菓子持つていきやいいだろー！…」

ウチらは今、捩目山へと向かう新幹線の中、インディアンポーカーならぬ、妖怪ポーカーをしていて、
さつきからウチとリクオくんが20連勝している。

リクオくんがぬらりひょんのカードを、ウチが天狗のカードを取っている。（もちろん全20回とも）

主催者^{ワカメ}は始まつてから一番弱い納豆小僧しかとらへん。

ウチらもすごいが、ワカメも十分すごい。

「奴良・・・お前「妖怪運」あるな・・・普通じゃねえぜ 20
連勝」

「ええっ！？何言つてんだよ！..たまたまだよ たまたまー！ボク
はフツー フツー！..」

悪いが、普通の人はおじいちゃんに妖怪の総大将なんて持つてない。

皆持つていたら、ある意味怖いというかカオスだ。

「あ ボク何か買つてくるよ 何がいいか言ってー」

「え？でも戦績一番悪い人がつて・・・」

「いーのいーの！..ボクこーいうの好きだから！..」

「奴良～～やつぱ良い奴～～ じゃあ冷凍ミカンプリーズ」

リクオくんは優しいっていうか…なんというか…

若干パシリ化してないか…？

てか、さつきからリクオくんに熱い視線を送ってる雪女にカナが疑い？ 疑問？ の視線を送ってるんだけど…ある意味雪女より熱いぜ…！

何か面白いなあ…

リクオくんもリクオくんで罪な男やなあ…

あんなに可愛い（雪女です。Not 家長カナ）子達に好かれて…

ほとんど夜の方やけど…；

新幹線とバスを利用し、捩眼山にやつと着いたウチら。

捩眼山のふもとに到着したバスから降り、何人かが背を伸ばす。

「ふわ～～やあつとついた～～つかれた　　」

「清継くん～～別荘は～～温泉は～～？」

「そんなのは夜だ！…あいぐよ…！」

「うはあ～温泉楽しみ～～」

一時間後

「なんだよ～～～～～す～～～～と山じゃんか…～」

「あたり前だ！…修業だぞ…～」

「足いたい～」

ウチらが山に入つて一時間、まだまだ山は続く。

皆もつ限界のよつで、ワカメにキレている子達が何人かある…

てか、マジでこれどこまで続くの！？

ウチは修行（陰陽師＆言霊術師）のおかげであまりつらくないんけど、他の子たちがなあ…？

大丈夫かな… そういえば、原作ではウチが？梅若丸のほこら？を見つけるんやつたけ…？見つかるかな…

『なんやう…あれ…』

よし、発見…！

「え？」

ウチの視線の先には、小さなほこらがあった。

多分これが？梅若丸のほこら？やつたと想つ…

『何か書いてある』

「うへん読めないぞ？」

『ちよつと見てきます』

「アクティブな陰陽師だ」

「？梅若丸？って書いてあるよーー。」

リクオくんてもうメガネいらんとかやつ？あんな遠いもん見れるなんて…

さすがは次期妖怪の主…（関係ねえ…）

『あつ ホントや』

「梅若丸のほーいり…あつといりだー…やつたやうひへん…さすがだなーー。」

ワカメはそう言い、ウチの肩を叩いた。

てか、ワカメの分際でウチのこと触んじゃねえ…虫唾が走るわ…

『はあ…』

「意外と早く見つけたな…さすが清十字怪奇探偵団…！」

誰かがいきなり声を掛けてきた。

この人は確か…

「ああ…！あなたは…！作家にして妖怪研究家の…化原先生…！」

ウチと牛鬼編突入（後書き）

ちょっと短くて、すみません…
多分今度こそ長くなります…

ウチヒ櫻井丸のぼり（繪書き）

更新遅れてしません…

最近忙しくて…ソレも言訳にしか聞こえないでしょウカビ…

本当にすみません

これからはちまちま更新頑張つてこわたいと思ひます

ウチと梅若丸のほこら

「ああ！！！あなたは！！！作家にして妖怪研究家の…化原先生！！！」

そう、原作で？化原？と名乗る妖怪研究家であり、
実際は馬頭丸に操られるんだつたけ…？

ある意味可哀想なギヤテケターなんだけれどな。自分で中で

「お会い出来て光榮です！！」

「うんうん」

.....」

感激するワカメと化原を冷たい、変な物を見る目で皆は黙視する

ウチも変態を見るよつた田で化原を見ていると、奴は梅若丸にいつて話し始めた…

「か、これつて實際には馬頭丸がしゃべんつてんだよね…牛鬼様大好きなのかな…？」

「梅若丸…千年程前にこの山に迷い込んだやん」となき家の少年の名…生き別れた母を探しに東へと旅をする途中、この山に住まつ妖怪におそわれた」

「ほつ…妖怪に…」

「それが、当時の牛鬼なんだよね…？」

牛みたいなクモみたいな…キモい奴…

「」の地にあつた一本杉の前で命を落とす、だが、母を救えぬ無念の心が

「この山の靈障にあてられたか　哀しい存在へと姿を変えた

梅若丸は？鬼？となつ　この山に迷い込む者どもをおやつようになつた

「その梅若丸の暴走をくじとめるために　この山にまごくつもの供
養碑がある
そのうちの一つがこの？梅若丸のほこり？だ」

牛鬼も、すごい過去を背負つているんだよね
自分的には牛鬼好きだから、何かしてあげたいよね…

『……梅若丸…（もう、牛鬼はそう呼ばれないのかな…）』

「意外にありがちな昔話じやんか」

「妖怪先生が妖怪修業なんてやーからセー」

「そう言い、鳥居達は男の話を信じようとしないまあ、普通の人ならそういう態度だよね

「あれ? 信じてない? んじゃーもう少し見て廻らうか~」

そういう化原に呑みついでいった

「すつ」霧深いなあ…全然晴れてたのに…」

そういう、ワカメは周りを見回した

相当息があがつてんなあ…

「ん? 何だこれ…」

巻はそういうと、隣にあったものを触ろうとした

「それは爪だよ

「爪ー?」

化原の発言で、皆は改めて自分たちの周りの木に刺さっている木を見た

「ケが生えてるってことは、相当時間たってるんだなあ…

今の牛鬼さんもこんな爪あるよねえ…

「リリは妖怪の住まい山だ もげた爪くじでおどりこけやー」リリ
る

怖がる鳥居たちをよそに、化原は話を続ける…

「三にまよいこんだ…

……旅人をおそう妖怪……名を?牛鬼?とこいつ

この話を聞いたとたん、巻と鳥居が帰らひつじ騒ぎ出すわ…

リクオくんもそれに賛成する

まあ…ウチもそれには賛成やな 」のままリリについても面倒だし…

でも原作どおりに進ませるにはこのイベントは必要なんだよねえ…
ハア…

リクオくんの言葉を聴いた一人はリクオくんを連れて山を降りようと/or>するけど、ワカメがそれをとめ、さらに続ける

「暗くなつた山をおりる方が危険だ…それにおりてもバスはもうない」

「ええ」

巻と鳥居が嫌な顔をする。てか、その反応普通…

普通の人はこんな所に一晩いたいとは思わないよ…梅若とか妖怪さんたちはOK!

「ふふ…何をビビつているんだ君たち…? ボクの別荘があるじゃないか…!」

この山の妖怪研究の最前線…! セキュリティも当然バツグンだ…!」

彼が示す先には、一つの建物 別荘があつた。

てか、よくこんな所に別荘建てたなあ……馬鹿か……？馬鹿だな

「セキュリティ？ 妖怪に？ きくかな……？」

「リクオくんもつともなことこうねえ……」

実際にこんなセキュリティが効く妖怪、いたら見てみたいよ

「使用者が時々来てるが何か出たなんて話1回もないぞ！？ 君たちは心配しそぎだ！！」

妖怪運の悪さで一回も妖怪を見たことがないお前に、そんなこと言われても全然信用ならん！！

「ハツハツハツ・・・まあ・・・いうても牛鬼なんて伝説じゃから、あのツメも誰かの作り物かもしれんしの～」

お前がわざわざ本物です～ヤバイよ～的な発言したんだろ！～

「いや・・・それは・・・」

「ほらリクオくんも言葉つまつてんじゃねえか……！」

化原もああ言い、ワカメも引かないし、しかも巻たちを食事や温泉

で釣り始めた……

「それにほら……おそわれたとしても」ひかには少女陰陽師 花開院ゆうくんがいるわけだ!! ねえ! ? ゆうくん大丈夫だよねえ! ?」

聞いてくる位なら、ここにいなければ良いのに……タクシーとか呼べるだろ? …

『……』

一応念のために式神は何体か持つておぐか

四神も呼べるけど、そうしたら馬頭丸が可哀想だし……

てか、ウチ、言霊術師でもあるつていつたよね……皆そこスルーなの! ?

てか、この牛鬼編入つてから、ウチあんまししゃべってなくね……? 心の中では超いっぱいしゃべりまくつてるけど……

あの後ワカメが化原も一緒に別荘にどつかと誘つたが、化原はウチ
らに忠告を残して帰つていった……

確かこの後、馬頭丸が化原からあの変な糸をとるんだよなあ……

糸がとれたら、今まで自分が何をやっていたか覚えていない……的な?

ある意味最強じゃん……！

ウチと梅若丸のほーじら（後書き）

次回は多分戦闘シーン…

上手に書けるよう、祈っていてください…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0821x/>

偉大なる陰陽師の言霊術師

2012年1月8日23時46分発行